レイク・タホー

ハースト・キャッスルを見て、翌日はシリコンバレーに向かう。

ここは以前お客様だった会社に何度も出張で来ているので、慣れた場所であるし、又、1976 年沖縄国際海洋博覧会以来の友人、岩澤矩美子さんが岩澤オリエンタル・アートという骨董屋さんを開いているロス・ガトスの近くでもある。毎年、シリコンバレーに来ると、矩美さんの入っているスポーツ・クラブに便乗して、大きなプールで泳いでその後食事をする、というのがいつものコースとなっていた。

でも、今回は仕事ではないし、矩美さんに事前の連絡も入れていない。夏はお店を閉めているかも、と、思いつつお店に行ってみると運良く日本から帰ったばかりの矩美さんがいた。聞くと、丁度この日は、ロス・ガトス・ジャズ・フェスティバルで、友人達とジャズを聞きに行きその後矩美さんの自宅でパーティーだという。飛び入りで参加することになった。カリフォルニアの人達は、何と優しく、大らかなんだろう。

矩美さんの友人は、骨董品のお客さんであったのが親しくなった、とかだろうか、皆、暇とお金に余裕のある人達みたい。トニーというドイツ人のスポーツマンがいて、私が自動車でアメリカー周旅行だと言うと、自分の車から地図を持ち出してきて、絶対レイク・タホーに行きなさいという。矩美さんは、レイク・タホーもヨセミテも、カルメルも皆いいところだから、全部回れば、と。昔、彼女の友人の若い二人が半年かけてアメリカー周をして、それがその後の彼等の基盤になった、のだそうだ。

でも、矩美さんの言う通りにしていたら、私などは一生 NY に帰れなくなってしまいそうな雰囲気だ。そこでレイク・タホーには行くことにして、私は一人旅を続けることにした。

シリコンバレーとサンフランシスコを結ぶルート 101 を途中で北に向けて進路を変え、I-80 を東に向ける。このまま I-80 に乗っていれば、いずれは NY に着くという横断幹線ハイウェイではあるが、その前に今度は南に下って、レイク・タホーについたのは2時頃。この湖を取り巻いている町に入ったところのトラベロッジで丁度部屋が一部屋だけ空いていた。早速荷物を降ろして、そのまま湖を一周することにした。レイク・タホーは標高 1,800 メートルのところにある湖で最長 35Km、幅 20Km、周囲 113Km というから、琵琶湖の半分位か。カリフォルニアとネバダの二州に跨っている。ここは、夏はモーターボート、ウィンド・サーフィンと水上スポーツ、冬はスキー、と一年中のレジャー地である。不動産ブームを迎えたアメリカでも有数の高級地として IT 成金が買い捲っている土地の一つだ。その理由は、湖そのものの美しさと古くから営業している周囲の老舗の店そして最近流行りのカジノ・ホテルの建設、といったところだろう。湖を一周して驚いた。この大きな湖とそれを取り巻く林の間に地面が見えない。まるで、湖の中から樹木が真直ぐ空に向けて生えてきたような。そして所々水の色がエメラルドになったり、濃紺になったり。何と端整で華麗な湖だろう。

冬のレイク・タホー

でも湖に気を取られていると、ヘタしたらドボン、と行きそうな曲がり道、それも急カーブが多い。なるほど、それでホテルの人が一周するには 2 時間位掛かりますよと言った意味が判った。長さで考えて私は 1 時間もあれば周れるだろうとタカを括っていたのだ。

レイク・タホーの周囲にある老舗の店は確かに代々続いた店の風格はあるが、どこも店主は引退間際のお年寄り（私と同年位）が多く、代わりに水上スポーツ、ボードの修理屋などの新興店には 20 代、30 代の若者が多い。ということは、レイク・タホーも曲がり角に来ている。思いなしか、老舗の店に入って客とのやり取りを聞いていると、店主の口調には若干苛立ちが感じ取れる。「何でこんな若造におべっかを言わなきゃいけなんだ」と言いたげな。このレイク・タホーが不動産投資としては最高である、という事実から垣間見える成金候補者の慢心かも。これは貧乏者の僻みか。

ところでウェブサイトで見るレイク・タホーの公式サイトには事実と統計として、レイク・タホーで溺れた場合は死体回収が難しい、何となれば水温が低い為、死体が上がってくるのに必要なガスが生成されずそのまま湖底に保存されるからとの一文があった。レイク・タホーを勧めたトニーは、ここではスカイ・ダイビングをすると言っていた。彼はこのサイトを見たのかしら、と余計な事が気になる。

オレゴンへ

レイク・タホーを後にして、I-80 を西に戻り、今度は北に向けてオレゴンに向かう。カリフォルニアは日本とほぼ同じくらいの面積である。これでカリフォルニアには述べ 5 日使ったことになる。

そろそろ次の州に移る時だ。この日 8 月 26 日。NY を出て 3 週間。

旅も慣れてきたとはいうものの、殆ど毎日寝るベッドが違うというのは、さすがにシンドイと思い始める。実際、時々夜中に眼が覚めて、ここは何処だろうと考える日も出てきた。後半戦に入ったという中だるみからか、今度は NY に帰ることが次の目的みたいな気がしてくる。更に独り旅の気楽さは、裏を返せば自己責任、常に事故と隣り合わせと言える。ブレーキを踏みそこねて前の車に追突事故を起こす想像に襲われたり。そんな雑念は振り捨てて、次の一日を無事クリアすることに集中しよう。

サクラメントを北上し、一面の畑の中を進んでいく。一面の畑ということは遮るものが何も無い。ラジオは AM も、FM も共に盛大に入ってくる。何故かハリケーン・カトリーナの話題ばかりだ。ほんの 7 日か 8 日前に泊まったばかりのニュー・オリンズに向かっている、と？　ラジオはその話題に集中している。テキサス大平原では、遮る物も無い代わりにラジオ局も無いし、電波も届かないから、ラジオもロクに聞けなかったのが、ここでは局数の多いこと。メキシコ放送は陽気な音楽を威勢よく流している。

それでもこの時はハリケーンは未だ3の段階であった。

オレゴンに入り、翌日 27 日は、ポートランドを経由してマルトノマ滝のあるコロンビア国立公園に行く。話しに聞いた通り緑と水の多い雄大な自然である。滝は華厳の滝の倍近い落下差があると言われるが、華厳の滝のような荘厳さ神秘性は無い。むしろアメリカでは辺りの壮大さの中では可愛らしいという印象になってしまう。夕方ラジオではハリケーンが4の段階になったと報道していた。

オレゴン州ポートランド近郊のマルトモナの滝。全長 180M.

ロッキー山脈

オレゴンと次の宿泊所のアイダホの間は、ロッキー山脈が通っている。この山越えが 28 日。この日の早朝ハリケーン・カトリーナは5段階となった、とラジオで聞く。やれやれ大変になったな、と他人事と思いながら山の中を行く。人家はゼロ。車もゼロ。この日は天候もどんよりしている。ここでエンコでもしたら大変。と思ったその時、いきなり辺りが暗くなった。山の天候は変わりやすいのか、と思った途端、ぱーっと吹雪に包まれた。エッまだ 8 月なのに。急に寒くなる。車の外気温度の表示に眼をやる。数字はどんどん下がって行って、華氏 31 度。氷点下である。つい今朝は 58 度位だったのが、いきなり氷点下。

吹雪で前は見えず空も真っ暗。どうしよう。先ず、ヘッドライトをつける。これで道路はうっすらと見える。ウィンドウ・シールドの雨よけをオンにする。雪だから余り関係ない。後続の車が来る。脇によけて待ってみる。車は通り過ぎて行った。それもかなりのスピードで。多分この辺りの人だろう。ということは、私もその後をついていけばいいのか。そう思い直して、ゆっくり走り出す。まだ朝の 10 時だ。山さえ越えれば、いくらなんでも人家も出て来るだろう。

ゆっくり、ゆっくり走って 20 分。いきなり空が晴れだした。山の天気は悪くなる時も回復も早い。雪はどこへやら。ホッとしてラジオをつけてみる。カトリーナは猛烈な勢いでニューオリンズ、ミシシッピ、アラバマと破壊を続けている。もしかして、この雪もこの影響だったのだろうか。

アイダホに入ってロッキーの腹沿いに道を下っていくとボイジという街にでる。仕事をしている時、お客様にハイテク関連の企業があり、その支店がボイジにあった。何故、ボイジにハイテクの会社が支店を出したのか、それが識りたくて今回の旅で寄ってみた。ボイジの工場地帯は見渡す限りの畑の中にだだっ広く横たわっていた。土地だけはいくらでも、というところだ。タテに高いビルは無し。とはいえ、モトローラだって事務所を持っている。将来性を考えれば、こうした土地はいいのかも。